

## 大切な日

廣瀬みお（神奈川県横浜市）

私の思い出の味。それは、ショートケーキだ。私が六年前に食べたあのほんのり甘い味は、友情と優しさに溢れていた。

十年前、私は原因不明の体調不良が続いた。病院で検査を受け、牛乳アレルギーと診断された。それまで、乳製品を気にせず摂取していたため、食物アレルギーがある事を知った時はとても驚いた。しかし、小学校低学年の私はアレルギーについて深く理解する事ができず、突然牛乳を飲めなくなった事に対してかなり抵抗していた。食物アレルギーをもつクラスメイトは私だけだった。一人だけ給食が違い、クラスの中で目立っていた。私が違うメニューを食べる理由を友達に聞かれても、うまく返事をする事はできなかった。「今日の給食は、揚げパンだ！」「おかわりじゃんけんをしよう！」いつも給食の時間には、私が入れない会話ばかり。「ひとりぼっち」そんな気持ちだった。

高学年になるにつれて、私はアレルギーについてし事に使われた。それは「バームクーヘンの小屋」だったのだ。小学校でバームクーヘンの小屋があるなんて信じ難いかもしれないが、これは本当の話だ。バームクーヘン屋の店長さんへ職業調べに行ったのがきっかけで、店長さんが焼きたてのバームクーヘンをプレゼントしようとして企画してくれたらしい。先生から、その話を聞いたときクラスみんなはとても喜んだ。喜ばないはずがなかった、私以外は。この時私は再び「ひとりぼっち」を感じた。お菓子から興味をなくしたと思っていたのに、どうしてだろうか。むしろ悲しい気持ちになった。バームクーヘンの味が思い出せない。もう、私の記憶からお菓子の味は曖昧なものになっていた。バームクーヘンプレゼント日、みんなとても興奮していた。私も一人教室に残るのも嫌だったのだ、みんなと同じように列に並んだ。みんな、一切れずつ受け取りその場で食べた。辺りは、バターと甘い香りでいっぱいだった。私は、ティッシュに急いでくみランドセルの中に押し込んだ。

数日後、私たちはお礼の手紙を書いた。私は何を書いたらいいか分からなかったが、素直に書こうと思っただ。「私は、バームクーヘンを妹にあげました。とても、美味しそうに食べていました。いつか、私も乳製

つかりとした説明をうけ、周りの友達も理解してくれるようになった。そのころになると、私は乳製品をとらない事があたりまえになり、周りがお菓子を食べようと、給食が一人違おうと、気にする事はなかった。ただ、あの日がくるまでは。

私の町には、有名なお菓子屋さんがある。そのお店の周りはいつもの、甘くて美味しそうな香りが漂っている。このお店は、町のバスデーケーキを担当している超人気店だ。しかし、私はもちろん自分の誕生日ですらケーキを食べる事はできない。そのため、この店は私と無縁のはずだった。

小学校の校庭の一角に小さな小屋が出来た。町内のボランティアが二週間くらいかけて作った。当時、この小屋が何に使われるか知らされていなかったため、私たちはいろんな想像をした。うさを飼うのではないかと、体育の用具入れになるのではないかと、などいろんな噂が広まった。しかし、実際はもっと嬉しい

品が食べられるようになったら、バームクーヘンもショートケーキも買ってもらいます。」その手紙からだった。私の忘れたい、ショートケーキが作られたのは。その年の、誕生日。私は友達と誕生日会をした。いつもなら、ゼリーがでてくるはずなのに、友達から大きな四角い箱を渡された。開けてみると、真っ赤ないちごがのつたショートケーキが入っていた。最初の、なんの事かよく分からず私以外はケーキを食べるのか、と思った。しかし、そのケーキはバームクーヘン屋さんが作ってくれた「特製豆乳ケーキだ」だった。私は、ケーキを食べられる事を知り嬉しくて涙がとまらなかつた。私の手紙を読んだ店長さん、そしていつも私に気を使ってくれていた友達がこのケーキのサプライズをしてくれた。みんなと同じものを食べられる事、そして久しぶりに食べた甘くて美味しいケーキ。今までの「ひとりぼっち」から解放された気分だった。いろんな人の優しさを感じたあの日の誕生日は今でも忘れられない事ではない。

今では、アレルギーも改善され色々な物が食べられるようになった。それでも、私の中で一番心に残るのは、あの日食べた幸せのショートケーキである事はいつまでも変わらないだろう。